

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

第1章 はじめに（前提条件の整理）

1 はじめに

（1）序

本市では、尾張名古屋のシンボルである名古屋城及びその周辺の魅力向上とにぎわい創出を目的とした「金シャチ横丁構想」を推進している。同構想は段階的に整備を進めることとしており、平成 30 年（2018）3 月には第 1 期整備として名古屋の食文化を楽しめる飲食施設等を開業した。引き続き第 2 期整備の一つとして、名古屋城博物館（仮称）及びその周辺区域の整備を検討している。名古屋城博物館（仮称）は、名古屋城の歴史や特別史跡としての本質的価値・魅力を伝えるとともに、日本全国の城郭を取り上げその特徴を検証・紹介する、城に関する総合的な博物館を想定している。

今後、更なる整備が進む特別史跡名古屋城跡と一体となって、当地域における歴史文化観光の拠点となることを目指し、本博物館を中心としたエリア一帯の整備方針等を基本構想として策定する。

（2）本事業が必要とされる背景

○特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進への取り組みからみた背景

名古屋城は昭和 5 年（1930）、城郭として旧国宝第一号に指定され、昭和 27 年（1952）、往時の姿をよく伝える国内屈指の城郭として、国の特別史跡に指定された。日本の城郭史上、近世城郭の代表的な城である名古屋城の理解促進のため、その価値と魅力を広く内外に発信する取り組みが必要である。

○特別史跡名古屋城跡の本質的価値の魅力向上への取り組みからみた背景

本市では「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」に基づき、特別史跡名古屋城跡の魅力向上にむけた修復・整備を行っているが、これらを発信する場が現状において不足していることに加え、天守の木造復元により失われるガイダンス機能を承継、充実する必要がある。

○名古屋観光からみた背景

本市の主要観光資源の中で、名古屋城は認知度・訪問意向・体験割合が最も高い一方、魅力を感じられていない回答も一定数ある。名古屋城での滞在時間の短さの解消を図りつつ、歴史文化観光拠点として市内観光をけん引する役割を担うことが期待される。

（3）本事業の目的

○特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進と魅力発信及び後世への継承

名古屋城の価値と魅力を広く発信し、来訪者へ本質的価値の理解促進を図る。名古屋城は、城に関する記録が多く遺されており、継承してきた文化財を適切に保存するとともに、新たに収集、調査研究を行う必要がある。そして、貴重な文化資源を確実に後世に伝えていく使命を有している。

○近世以降の名古屋の歴史や日本の歩みの理解促進

名古屋城の歴史や価値・魅力を学ぶことは近世以降の名古屋のまちの軌跡をより深く知ることにつながる。また、名古屋城の歴史を通して、近世武家文化や幕末の動乱期、都市の近代化、戦後の混乱期から戦後復興等、近世以降の日本が経験した時代的な特徴を概観できる。

○日本の城郭の価値や魅力の発信

名古屋城は日本を代表する城郭であり、究極の近世城郭といわれる名古屋城を紹介する博物館だからこそ、日本全国の城郭の特色と歴史を発信する意義がある。また、日本の他の城郭と比較することを通じて、名古

屋城の特徴や価値をより明確にし、さらに深く学ぶことにつなげる。

○名古屋観光の魅力向上

国内外からの来訪者が名古屋の都市魅力を再発見する契機となるよう、歴史文化観光拠点となることを目指し、名古屋城博物館（仮称）を中心としたエリア一帯の整備を進める。名古屋城を基点として他の史跡や施設へ誘う機能を設け、観光客誘致に相乗効果をもたらし、地域活力向上に寄与する。

（4）博物館に求められる新たな役割

近年の博物館は、博物館法に定められた本来機能（㊟収集・保管、㊟展示・教育、㊟調査・研究）に加え、地域振興や観光、社会的包摂、福祉など、地域の課題への対応といった複雑化・多様化した社会的役割が求められている。令和 4 年（2022）に博物館法が一部改正され、「博物館の事業に、博物館資料のデジタル・アーカイブ化を追加することとともに、他の博物館と連携すること、及び地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動を図り、地域の活力向上に取り組むこと」が掲げられた。本博物館においても、このような時代の変化に対応し、これからの時代にふさわしい博物館像が求められている。

2 歴史的変遷（名古屋城及び対象想定区域）

名古屋城の築城は、慶長 15 年（1610）より西国・北国の諸大名 20 家を動員する公儀普請で実施された。名古屋城の歴史的変遷は下表の通りである（下表：名古屋城の歴史）。名古屋城博物館（仮称）の整備候補区域には、江戸時代、「三之丸東照宮（徳川義直によって父・家康公の菩提を弔うため建立）」と「^{かめのお}亀尾^{てんのうしや}天王社」が立地していた。現在、整備候補区域北東部には「安養寺（天王坊）」の庭園遺構と伝わる築山の一部や、中央部には樹齢 150 年以上と推定される「オガタマノキ」が現存している他、南東隅には陸軍旧第三師団司令部の煉瓦^{れんが}塀、軍人勅諭下賜時の記念樹といった陸軍関連遺構も遺されている。

年号	名古屋城での出来事
永享五年 (一四三三)	この頃、記録に那古野館の存在が確認できる
大永年閏 (一五二一・二)	今川氏親、那古野城を改修し、子の氏量を置く
天文七年 (一五三八)	この頃、横田信実、今川氏量を追放し那古野城を攻略
天文三三年 (一五五四)	横田信実、津須城を築取し
慶長一五年 (一六〇〇)	徳川家康、名古屋城を命じる
慶長一七年 (一六二二)	天守竣工する
慶長二〇年 (一六四五)	本丸御殿竣工する
元和六年 (一六二〇)	尾張徳川家初代養子、本丸御殿より
寛永一一年 (一六三四)	本丸御殿を増築し、三代将軍家光を迎える
宝暦五年 (一七五五)	天守台石垣普請・天守修理が完成する
文政五年 (一八二二)	尾張徳川家一〇代家明、二之丸御殿および庭園を大改修する
慶応元年 (一八六五)	一四代将軍家茂、本丸御殿に宿泊する
明治四年 (一八七一)	慶應義塾により名古屋城は新政府へ引き渡される
明治五年 (一八七二)	金鯱が東京へ運ばれる
明治五年 (一八七二)	名古屋城を陸軍省所管とする
明治四年 (一八七二)	濃尾大震災により、被害を受ける
明治二四年 (一八九)	名古屋城本丸と西之丸の一部を名古屋建宮とし、陸軍省から宮内省に所管替えとなる
明治二六年 (一八九三)	宮内省より名古屋市へ名古屋城が下賜され、城郭建築として初の国宝に指定される
昭和五年 (一九三〇)	名古屋城が一般公開される
昭和六年 (一九三二)	名古屋空襲により、城内の主要な建造物が焼失する
昭和二〇年 (一九四五)	名古屋城が国指定特別史跡となる
昭和二七年 (一九五二)	天守閣・小天守閣の再建工事が竣工する
昭和五九 (一九五九)	本丸御殿が再建される
平成三〇年 (一九八八)	二之丸庭園全域が国指定名勝に追加指定される
令和三年 (二〇一一)	西之丸御蔵城宝殿(二重御蔵・四重御蔵外観復元)が開始する

3 現代における名古屋城

（1）歴史・美術・建築の観点からみた名古屋城の意義

名古屋城は、近世城郭築城技術の完成期に公儀普請によって築城された姿を現代に伝えている数少ない城郭の一つであり、現存する遺構から往時の姿を見られる歴史的価値の高い城跡である。さらに、名古屋城には城に関する記録が多岐にわたって遺されていることから、豊富な史資料に基づいた、史実に忠実な復元が可能である。そのため、本市では「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」に基づき、より充実した保存・整備を実施して名古屋城の価値や魅力を具現化していく予定である。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

（２）市民からみた名古屋城の価値・意義

○認知度の高さ

名古屋城は、本市を代表する観光地として多くの来場者を集めている。令和３年（2021）度に全国の18～79歳の男女1,113人に行われたアンケート調査^{注１}（以下「全国アンケート調査」）によると、79.6%が「名古屋城」を知っている。さらに、名古屋城への訪問・体験割合が39.3%、訪問・体験意向が42.7%と名古屋の主要観光資源ですべてにおいてトップであり、全国的に認知された観光資源である。

【名古屋の主要観光資源（全国アンケート調査結果）】

	名古屋城	金シャチ横丁	徳川美術館	熱田神宮	四時道	リニア・鉄道館	トヨタ産業技術記念館	ノリタケの森	名古屋科学館（フナタリウムなど）	白鳥庭園	名古屋港（名古屋港水族館、シー・トレインなど）	東山動物園	久保田美術館（ヒルズ・オアシスなど）	栄・中区電力（MIRAI TOWER）
認知度	79.6	19.9	21.1	49.4	4.9	19.5	20.9	16.3	16.5	6.1	25.9	40.8	22.9	22.9
体験	39.3	13.7	13.3	25.9	4.6	9.5	8.9	5.8	9.3	2.9	12.0	12.2	20.1	20.1
訪問意向	42.7	22.7	20.5	28.3	4.2	16.6	14.4	12.4	10.3	9.2	17.0	23.3	12.2	12.2

	大須（大須観音・大須商店街）	文化のみち（二葉館など）	有松・日本遺産（街並み、有松・鳴海総合公園など）	桶狭間（桶狭間の戦いゆかりの地）	秀吉・清正記念館	レゴランド・ジャパン	しめん、みそかつ、手羽先など	名古屋まつり	にっぽんど真ん中祭り	世界コスプレサミット	名古屋おもてなし武将隊	その他	知っているものはない
認知度	19.5	2.6	7.0	23.2	4.0	35.1	49.1	8.9	7.7	5.9	10.1	0.1	10.8
体験	15.9	1.9	2.1	3.7	2.7	7.5	31.9	3.9	3.5	2.1	2.1	1.4	18.4
訪問意向	12.2	4.6	8.8	13.8	10.2	15.3	40.9	6.7	5.2	4.9	6.0	0.9	8.4

○市民の来訪

名古屋城は市民が繰り返し訪れる場所であり（名古屋市の入込客数（2,330万人）の居住構成を全国アンケート調査でみると市内が35%以上（818万人）／令和４年（2022）度に名古屋市在住の男女500人に行われたアンケート調査^{注２}（以下「市民アンケート調査」）によると、今までに名古屋城に行った回数は５回以上と答えた人が半数を占めているうえ、最近名古屋城に行ったのは１年以内である人が30%以上）、季節毎の植栽の観賞や散歩など、市民の日常に根差した活用がなされている。

四季折々のお祭り（名古屋城春まつり、夏まつり）や各種イベント（菊花大会、つばき展、にっぽんど真ん中祭り）の会場となっており、市民に広く利用され、愛されている城である。名古屋城は、市外や観光客だけでなく市民に寄り添い、市民からも愛され支持される場所となっている。

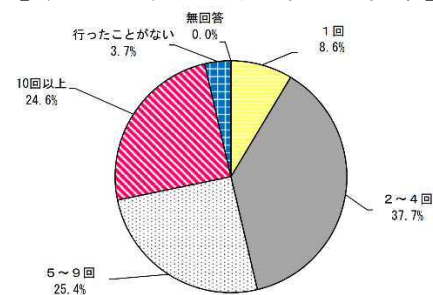
○市民が捉える価値

歴史的変遷にて整理したように、特に近代以降、名古屋城は名古屋市民にとってより身近な存在となり、名古屋のシンボル、誇りとして親しまれることとなった。戦災により天守をはじめ城内の主要建造物の大半が焼失したが、観光面での期待も高く、市民の機運の高まりを受け、昭和34年（1959）、市制70周年記念事業として大天守閣・小天守閣等は再建された。再建に向けた募金活動は広く県下で行われ、愛知県をあげての一大事業となり、再建された名古屋城天守閣は名古屋の街や戦後復興の象徴となった。このように名古屋城は市民の心のよりどころ、名古屋のシンボルとして市民に親しまれる存在となっている。

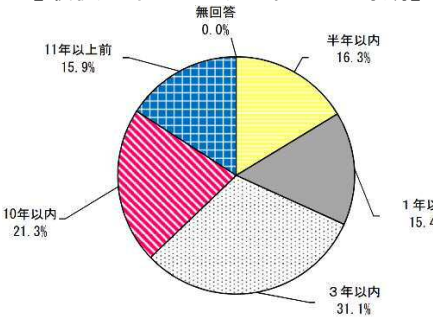
注１：名古屋市観光文化交流局「名古屋市観光客・宿泊客動向調査2021年 概要版」（令和４年10月）

注２：名古屋市観光文化交流局「令和４年度 第6回ネット・モニターアンケート」（令和４年10月）

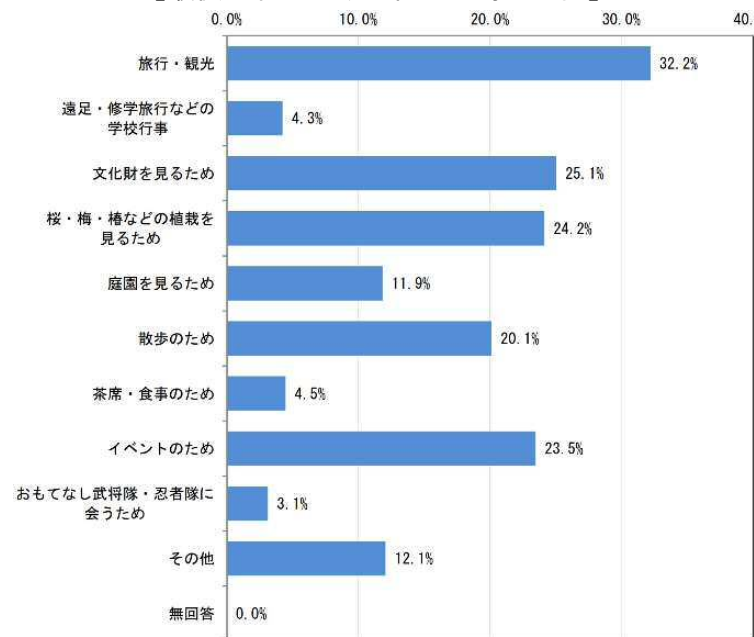
【今までに名古屋城に行った回数】



【最後に名古屋城に行った時期】



【最後に名古屋城に行った時の理由】



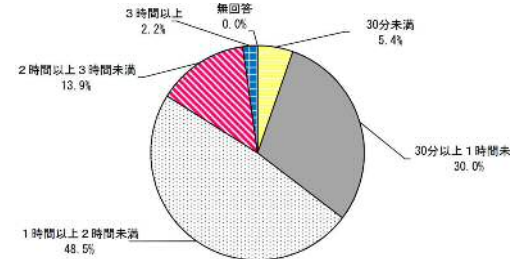
○名古屋及び名古屋城の課題

名古屋の観光地としての魅力を感じない（全国アンケート調査では、「魅力を感じる」が53.9%、「魅力を感じない」が14.2%、「どちらともいえない」が31.9%）理由として、「観光イメージが希薄である」「名古屋の魅力が全国的に十分知られていない」が指摘されており、観光地としての魅力向上と情報発信が必要がある。さらに、名古屋城の滞在時間の短さ（「1時間以上2時間未満」が半数近く）や、交通アクセスの向上（特に、57%が回答する「地下鉄」駅からの動線やアクセス性の工夫）を併せて検討していく必要がある。

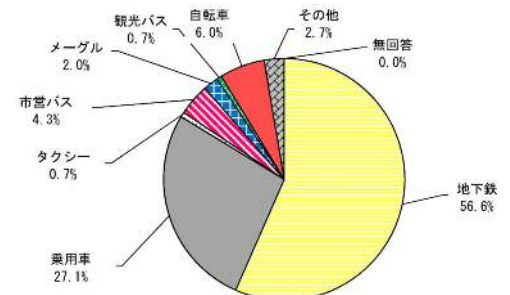
【名古屋に観光地としての魅力を感じない理由】

	他の観光都市と比べて観光イメージが希薄であること	名古屋の魅力が全国的に十分知られていないこと	魅力ある観光施設が少ないこと	魅力あるイベントが少ないこと	魅力ある食べ物・飲食店が少ないこと	魅力あるおみやげ品が少ないこと	交通アクセスが良くないこと	施設に楽しめる場所が少ないこと（観光施設の閉館時間が早いことなど）	観光客と接する事業者などの観光に対する意識が低いこと	まちがきれいでないこと	まちに緑が少ないこと	その他
全体 N=158	39.9	20.9	5.1	34.8	7.0	10.8	5.7	3.8	2.5	2.5	2.5	3.8

【名古屋城内を回るのにかけた時間】



【最後に名古屋城に行った時の交通手段】



金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

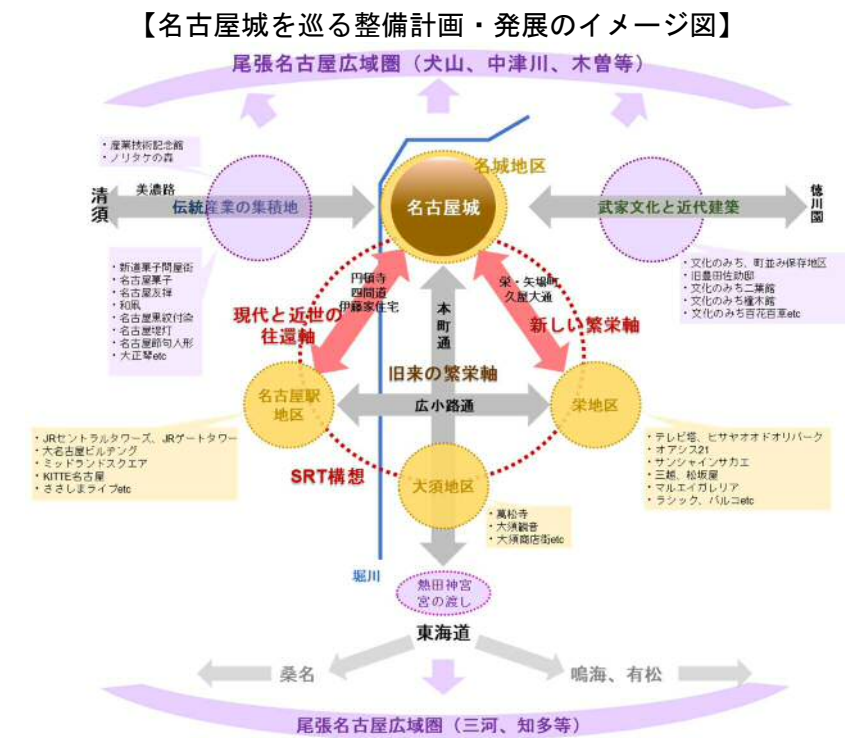
(3) 今後の名古屋城及びその周辺

整備候補区域からまちへの回遊性を向上させる取組みとして、名古屋城を中心とした観光体験の創出（堀川の水路軸を活かした観光体験（堀川観光船）や名古屋城の広大なスケールの水堀を体感し、歴史的景観を楽しむ体験（水堀での舟の周遊ツアー）等）があるほか、尾張藩連携事業を活用した国内外からの誘客やSRT構想との連携可能性の検討等、都心のまちづくりや観光誘客の取組と一体となって将来像を描くことが求められる。

4 整備候補区域の条件の整理

整備候補区域は、名古屋駅から地下鉄桜通線「久屋大通」駅で乗り換え、地下鉄名城線「名古屋城駅」下車徒歩約10分でアクセス可能である。

本事業の整備候補区域は、金シャチ横丁の南側にある、敷地①（約7,283㎡）、敷地②（約5,815㎡）、敷地③（約2,838㎡）及び敷地④（約667㎡）とする（以下、本事業の整備候補区域を「博物館ゾーン」と呼称する（但し、本事業の整備区域は今後確定）。なお、既存金シャチ横丁の一部は遺跡部分である。）。整備候補区域は都市公園である「名城公園」に含まれるため、都市公園法の順守、各種都市計画規制（市街化区域及び市街化調整区域、用途地域、容積率、建蔽率、高度地区、風致地区等）、名城郭内処理委員会申し合わせ事項等の規制項目に従う必要がある。



【博物館ゾーンの整備対象区域】



(赤枠内) 博物館ゾーンとしての整備候補区域
※区域は「世界の金シャチ横丁（仮称）基本構想」に基づく時点の想定
※金シャチ横丁にはみ出している箇所は遺跡部分

第2章 整備に当たっての基本的な考え方

1 博物館ゾーン及び名古屋城博物館（仮称）に求められる機能・役割

天守閣は再建以来、名古屋城の歴史及び構造について紹介する博物館として、重要文化財「本丸御殿障壁画」を含む数多くのコレクションを展示・公開してきたが、天守の木造復元にあたり、天守内は木造建築の技術と美を紹介する空間とし、ケースによる展示空間を設けない計画である。このことを前提として、博物館ゾーン及び名古屋城博物館（仮称）に求められる機能・役割を整理する。

(1) 博物館ゾーンに求められる機能

博物館ゾーンがもつ歴史性や場所性（立地の特性）といった特性を踏まえて、i) 知の拠点及びii) 観光の基点の機能を導入し、「歴史文化観光拠点」を整備する（知の拠点であることが観光の基点につながる）。

【博物館ゾーンに求められる機能：「歴史文化観光拠点」を目指す】

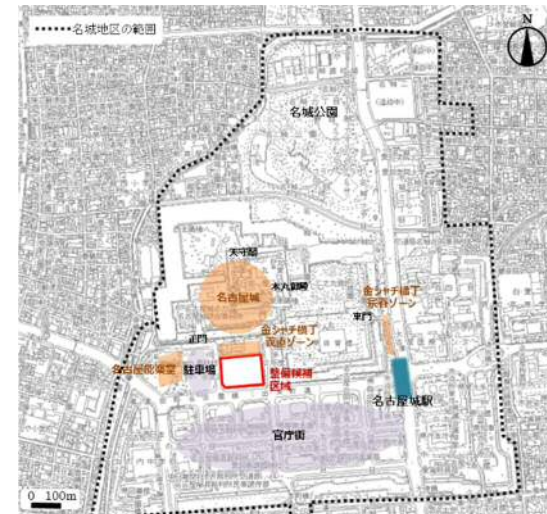
i) 名古屋城と一体となり、名古屋城の歴史や価値と魅力、日本の城郭の特徴を伝える「知の拠点」

ii) 名古屋観光の受入・周遊拠点として、市内観光へと誘う「観光の基点」

（東海道に繋がる旧来の繁栄軸、現代と近世の往還軸、新しい繁栄軸、徳川園につながる文化軸、清須に向かう伝統産業軸の結節点）



【博物館ゾーンの周辺環境】



【整備候補区域全体の整備計画】



金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

（２）名古屋城博物館（仮称）が果たすべき役割

博物館ゾーンの中核となる名古屋城博物館（仮称）は、博物館ゾーンに求められる i) 知の拠点及び ii) 観光の基点といった機能を実現するための役割を担う。さらに、本博物館は登録博物館（博物館法）、公開承認施設（文化財保護法）を目指し、情報発信機能を備えた調査・研究の中心としての役割を担う社会的意義も求められる。

【名古屋城博物館（仮称）が果たすべき役割】

機能	役割
知の拠点	・名古屋城の歴史や価値・魅力を伝え、後世に継承する役割 ・日本の城郭の特徴を検証・紹介する役割
観光の基点	・国内外の、子供から大人までを対象とする施設（名古屋随一の観光地） ・最新技術や五感で体感できる（味わえる）展示内容の充実を図る ・歴史文化観光拠点として、名古屋城周辺の観光地を巡る際に、歴史的な背景や名古屋城との関連を想起できるよう、名古屋城を基点とした歴史を、ストーリー性をもって理解できる施設とする

2 基本コンセプト

（１）博物館ゾーンのコンセプト

博物館ゾーンは、隣接する金シャチ横丁義直ゾーンも含め、尾張名古屋の歴史や文化、周辺とのつながりを学び、名古屋城の価値や魅力を再発見し、それをきっかけに名古屋城周辺及び市内に足をのばしてもらえ、エリア全体として「歴史文化観光拠点」となるような方向性を目指す。

【博物館ゾーンのコンセプト（案）】

名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイ

- ・名古屋城は、尾張名古屋の歴史の【入口（中核・シンボル）】
- ・名古屋随一の観光地であり、観光客が必ず訪れる名古屋観光の【玄関口】であり、本敷地や博物館を【基点】に市内観光に足を延ばしてもらう
- ・名古屋の都市基盤となる基盤割は、清須越（慶長 15 年（1610））に端を発する。名古屋の“まち”は、名古屋城が【出発点】
- ・究極の近世城郭である名古屋城をきっかけに、日本の城郭に関心をもつ【きっかけ】

（２）名古屋城博物館（仮称）のコンセプト

近世名古屋のまちは、名古屋台地の北端に徳川家康が名古屋城を築いた後、名古屋城とともに歩みを進めてきた。築城後のまちの繁栄や幕末の動乱期、戦後の混乱期から戦後復興まで、名古屋城は市民とともに歴史を歩み、時を刻んできた。実際、名古屋のまちは、築城の際の清須越の基盤割の上に名古屋城を基点として形成されていることに加え、名古屋城天守閣は戦後、まちの戦後復興の象徴として、市民の機運の高まりによって再建された経緯がある。現在でも、名古屋城は四季折々の祭りや季節イベントの会場となっているほか、市民アンケート調査結果でみられた通り、市民の季節毎の植栽鑑賞や散歩利用等の日常的な営みに根ざした場所である。このように、名古屋城は今までも、そしてこれからも名古屋のまちの発展を見守り、

市民とともに寄り添いながら歩いていく存在であると言える。

名古屋城博物館（仮称）は、このように名古屋のまちとともに歩んできた名古屋城に隣接し、名古屋城の歴史や価値と魅力を伝えることを目的としており、そのコンセプトを「城に学び、城と歩む」とする。

【名古屋城博物館（仮称）のコンセプト（案）】

城に学び、城と歩む

○「城に学び」に込めた意図

- 名古屋城の歴史や価値と魅力について学ぶことを通して、近世以降の名古屋のまちの軌跡をより深く知ることができる。
- 日本全国の城郭を学ぶことを通して、名古屋城の価値や魅力を再発見できる。
- 名古屋城では「城」そのものだけでなく、城の背景にある、土木技術、建築、自然史等のさまざまな複合的要素を学ぶことができる。

○「城と歩む」に込めた意図

- 名古屋城には、城に関する多岐にわたる記録が遺されており、これら史料群を収集・保存・調査研究を行い、名古屋城の価値・魅力を確実に後世に継承する。
- 戦災により城内の主要建造物の大半が焼失したが、再建に向けた募金活動は広く県下で行われ、天守閣は名古屋の街や戦後復興の象徴となった。
- 名古屋城は四季折々の祭りや季節イベント（菊花大会やつばき展等）の会場となっていることに加え、市民の日常的な散歩にも使われる等、市民に広く利用され、愛されている城である。
- これまでも城と市民が寄り添いながら歩いてきた（関わってきた）ように、これからも名古屋のまち／市民は、名古屋城とともに歩いていくことを象徴的に表現している。

3 期待される効果

前述した博物館ゾーンのコンセプトを踏まえ、想定する来訪者層および本事業がもたらす名古屋城およびその周辺エリアに期待される効果には、以下が挙げられる。

【博物館ゾーンの想定する来訪者層及び期待される効果】

機能	役割
想定する来訪者層	・城郭などの歴史に関心が高い市民や観光客 ・観光やイベントを目的として名古屋城を訪れる市民や観光客
博物館ゾーンの整備により期待される定量的効果	・総来訪者数は今後、検討を具体化する中で算出 名古屋城の天守木造復元後 ^{※1} における開館年度の名古屋城博物館（仮称）の有料ゾーンのみ来訪者数試算：推定約 21 万人 ^{※2} ・上記の有料ゾーンのみへの来訪者がもたらす本市内での総消費額試算：約 38 億円 ・上記の総消費額増加がもたらす本市内への経済波及効果試算：約 52 億円
博物館ゾーンの整備により期待される定性的効果	・名古屋城周辺エリアの魅力向上による来訪者の滞在時間増加とにぎわいの創出 ・名古屋城のガイドンス機能の確保による来訪者が名古屋城を学ぶ機会の保持 ・名古屋城に関する展示機能の拡充による来訪者への効用拡大 ・名古屋城に関する研究機能の拡充による市民・来訪者の名古屋城への理解促進 ・歴史文化観光拠点としての整備による名古屋観光への貢献

※1：天守木造復元後の年間入場者数は 366 万人と見込んでいる。

※2：近年、城郭の隣接地に整備された博物館の類似事例を参照し試算。無料ゾーンも含めた総来訪者数に関しては、今後、博物館ゾーン全体や名古屋城博物館（仮称）の整備計画の検討、施設規模や無料ゾーンも含めた誘客機能の具体化等、事業内容を精査する中で改めて算出する予定である。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

第3章 博物館ゾーン概要

1 整備の方針

■博物館ゾーンの整備方針

- ・特別史跡名古屋城跡の本質的価値の理解促進と魅力向上に資する取組みとする。
- ・名古屋城の全体像の理解や市内観光を促進するガイドンス機能を果たすため、来訪者を迎え入れ、送り出す玄関口となる位置に「知の拠点」の中心となる博物館ゾーンを整備する。
- ・名古屋城に隣接するという立地条件を踏まえ、名古屋城と一体となって、歴史文化観光拠点（「観光の基点」）となることを目指す。
- ・障害者や外国人観光客を含むあらゆる来訪者がストレスなく快適に過ごせるよう、施設環境や発信情報に対してユニバーサルデザインの視点を取り入れる。
- ・観光誘客施設を適切に配置し、これまで城郭に関心が低かった市民や観光客も来訪したいと思えるゾーンとして整備することで、本市の観光地としての認知度を向上させる。
- ・来訪者に気軽に立ち寄ってもらえるよう、有料ゾーンと無料ゾーンの区別を検討する。
- ・城郭などの歴史に関心が高い市民や観光客と、観光・イベントを目的として名古屋城を訪れる市民や観光客では、それぞれの滞在時間が異なることを踏まえ、両者の関心に対応できる整備とする。

■名古屋城博物館（仮称）の整備方針

- ・他施設と連携し、文化財等の資料を取り扱う企画展等の実施を見据え、国宝・重要文化財公開承認施設の要件を満たした環境を整える。
- ・特別史跡名古屋城跡の範囲外の敷地となるが、名古屋城の眺望を確保する等（例：屋上空間の活用）、名古屋城と一体感を感じられる施設とする。
- ・環境への負荷を低減しつつ安全に資料を保管できるよう、博物館 IPM[※]の積極的な導入を図る。
- ・名古屋城や尾張藩ゆかりの建造物を敷地内に移設し、屋外博物館としての機能も取り入れる。
- ・来訪者の興味関心や所要時間に応じた観覧ができるよう、観覧動線を配慮する。

注：博物館資料を適切な保存環境で保持することで生物被害の防止を目的とする文化財管理の技術。外部からの害虫の進入、屋内での営巣・繁殖を防ぐために適した建築や設備を備えるとともに、適切な管理を行う。

【取り扱うテーマ（近隣の博物館との差別化）】

施設名	テーマ
■取扱うテーマ（近隣の博物館との差別化）	
名古屋市博物館	・「名古屋市」を中心とした主に尾張地域の旧石器時代から現代までを扱う歴史系総合博物館 ・国内外の歴史、文化を紹介
徳川美術館・蓬左文庫	・尾張徳川家に伝来した什宝・書籍を元に「大名文化」の用と美を中心に取り上げる
愛知・名古屋 戦争に関する資料館	・戦争に関する実物資料の展示を行い、戦争体験を次の世代に引き継ぎ、戦争の残した教訓や平和の大切さを県民が学ぶことを目的とする ・「県民の戦争体験」と「戦争に関わる地域史」を軸とする地域性を重視した展示コーナーを設置
名古屋市政資料館	・国の重要文化財である「旧名古屋控訴院庁舎」の保存・公開 ・市の公文書館として、市政資料の収集・整理・公開
名古屋城博物館（仮称）	・名古屋城の歴史や特別史跡としての本質的価値・魅力を伝えとともに、日本全国の城郭を取り上げ、その特徴を検証・紹介する、城に関する総合的な博物館 ・城を通して名古屋の歴史・文化や近世以降の日本の歩みへの理解を促す
■位置づけ（城内における施設・展示施設との比較）	
天守・本丸御殿	・史実に忠実に復元された江戸期の姿を体感できる施設
西の丸御蔵城宝館	・重要文化財「本丸御殿障壁画」を中心とした資料の収蔵と、その収蔵品の公開を行う施設

【他の博物館等との連携の在り方】

他の博物館等との連携の在り方として、「全国・世界の城の展示や城に関する情報ネットワーク」や「共同調査・研究体制、相互研修体制の構築」といった連携を行う。



2 博物館ゾーン概要

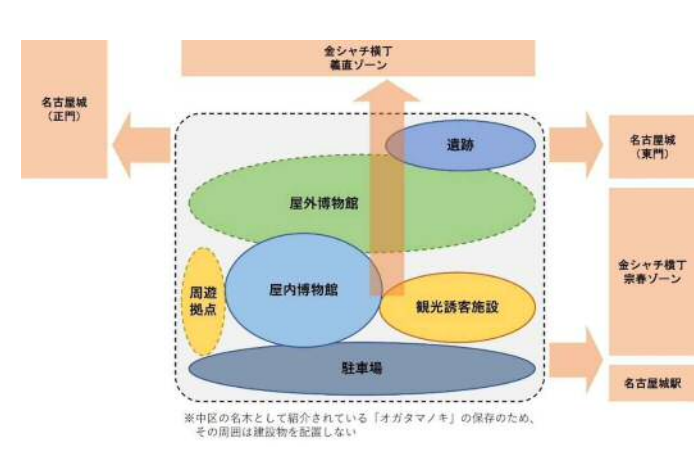
前章で検討した事業内容を実現できるゾーニング・動線及び施設内外に必要な機能について、以下の通り整理した。既存動線として、金シャチ横丁義直ゾーン内の東西方向に最寄り地下鉄駅である名古屋城駅と名古屋城（正門）をつなぐ歩行者動線があり、また、出来町通から正門前駐車場への車両動線が築かれている。

名古屋城の全体像をはじめ、その価値と魅力が理解しやすいよう、博物館ゾーン内における名古屋城のガイドンス機能と、名古屋城をつなぐ動線を確保する。また、既存の歩行者・車両動線から博物館ゾーンへの誘導を図る。

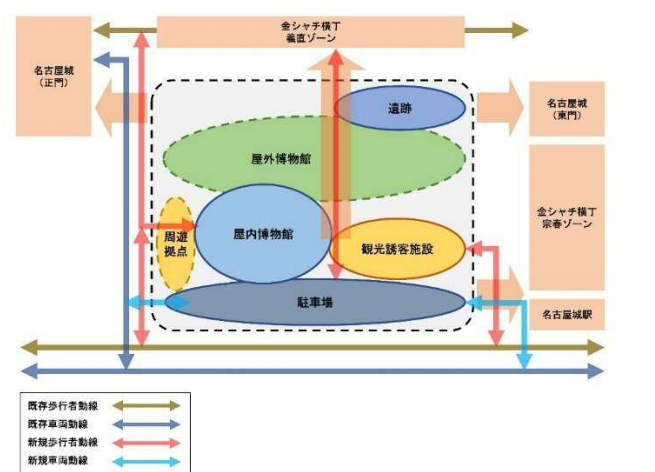
【整備対象区域のゾーニング】

施設	内容
屋内博物館	・これまで天守閣が担っていた博物館相当施設としてのガイドンス機能を包含し、さらに発展させた施設として名古屋城の価値や魅力を発信するため、必要面積を確保できる配置を検討する。
屋外博物館	・遺跡の保全を考慮した緩衝帯としての役割や、金シャチ横丁義直ゾーンと博物館ゾーンをつなぎ、エリア全体の魅力向上に寄与する空間として屋外博物館を配置する。例えば、名古屋城の建造技術に係る展示等が想定される。 ・観光誘客に資する屋外展示の開催や、団体客・教育旅行者の屋外休憩所として活用するなど多目的に利用可能な広場を配置する。
遺跡	・整備候補区域はかつて三之丸東照宮と亀尾天王社の境内であったとされ、その名残とされる石積み・築山等が残されている。今後、発掘調査を行い、その保全と活用について別途検討する必要がある。 ・敷地南東に陸軍時代に設置された煉瓦塀や軍人勅諭（明治 15 年（1882））下賜五十周年記念植樹の記念碑があることから、その保存と活用について検討する。
観光誘客施設	・博物館ゾーンの魅力を高め、より多くの人を惹きつける源泉となるよう、エリア一帯への観光客誘致に資する施設を検討し、適切に配置する。
周遊拠点	・市内の他の歴史文化施設へといざなうため、名古屋観光の受入・周遊拠点としての機能を確保する。
駐車場	・博物館ゾーン整備に伴ってエリア一帯への来訪者の増加が見込まれることから、既に近隣にある駐車場との役割分担も踏まえ、周辺道路からの車両動線に考慮した十分な駐車スペースを確保する。 ・大型バスや観光バスによる来訪者にも考慮する。 ・博物館資料の搬入口についても確保する必要があり、また、資料動線に配慮し適切な配置を検討する。

【必要な施設のイメージ】



【整備候補区域における動線の考え方】



注：上図はともにあくまでもイメージであり、施設配置を示すものではない。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

3 本博物館に必要な機能

「知の拠点」の中心となる名古屋城博物館（仮称）はこれまで天守閣が担ってきた役割（ガイダンス機能）を承継し、さらに発展させるとともに、名古屋城と一体となり、名古屋城の歴史や価値を学べる拠点として、また、城郭研究の拠点として研究成果の発信を行う（展示機能、教育普及機能）。さらに、質の高い展示機能や教育普及機能を担保するため、収集保存機能及び調査研究機能について、特に充実を図ることが求められる。

また、「観光の基点」の観点からも、歴史文化観光拠点施設としての役割や、今後の名古屋のまちづくりとの連携も見据えた活用等、現代の博物館に求められる役割に留意する必要がある。

以下に、博物館ゾーンの核である名古屋城博物館（仮称）に必要なとされる機能の検討内容を示す。

【名古屋城博物館（仮称）に必要な機能・諸室】

導入機能	内容（諸室）
ガイダンス機能	・名古屋城へ向かう正面玄関として、来訪者を迎え入れ、特別史跡名古屋城跡の全体像を紹介するガイダンスを行う。 ・歴史文化観光拠点施設として、ここでの体験や学びをきっかけに市内の他の観光地にも足を延ばしてもらう周遊観光を促進するため、本市の魅力を発信する。 【主な諸室：ガイダンススペース、観光情報スペース、展望スペース】
展示機能	・名古屋城に関する文化財を常時公開することを目的に、文化財の適切な保存・活用・調査・研究の成果を体系的に整理し、市民・来訪者等に向けての情報公開を行う。 ・実物資料と模型や映像等のコンテンツを効果的に組み合わせ、親しみやすく分かりやすい展示を行う。 【主な諸室：常設展示室、企画展示室、展示準備室】
教育普及機能	・展示機能と連動させ、さらに深い学びの活動を展開する。 ・調査研究センターが持つレファレンス対応をさらに深化させ、市民が交流しながらともに学ぶ、ラーニング機能の強化を図る。 【主な諸室：団体休憩室、図書・レファレンスコーナー】
収集保存機能	・幅広い層から支持・継続利用されるために、名古屋城に関する情報及び資料の収集を継続的に実施し、文化財の保存・継承に務める。 ・名古屋城に関する文化財を適切に保管しつつ、収蔵スペースの十分な確保や、収蔵庫の機能の充実を図る。 【主な諸室：収蔵庫、一時保管庫、トラックヤード・荷解室】
調査研究機能	・名古屋城の価値と魅力を明らかにするため、日本・世界を対象とした城郭研究を進める。 ・名古屋城博物館（仮称）を名古屋城の調査研究拠点として位置づけ、考古学・歴史学・美術史・建築史・庭園史などの分野を横断した総合的な調査研究を推進し、名古屋城の保存・活用を進めるとともに、その調査研究成果を広く情報発信していく。 ・名古屋城博物館（仮称）が継続的に市民や来訪者の知的好奇心を満足させる活動を実施するため、特に充実を図る機能として位置付ける。 【主な諸室：整理作業室、調査研究室、写真撮影室】
サービス機能	・交流空間として、トークイベントやギャラリーなど多目的に活用する。 【主な諸室：受付・エントランス、ギャラリー】
その他	・管理機能（事務室、館長室、応接室、ボランティア控室、会議室 など） ・共用部・その他（トイレ、授乳室、警備室、倉庫、廊下、階段・EV、機械室等）

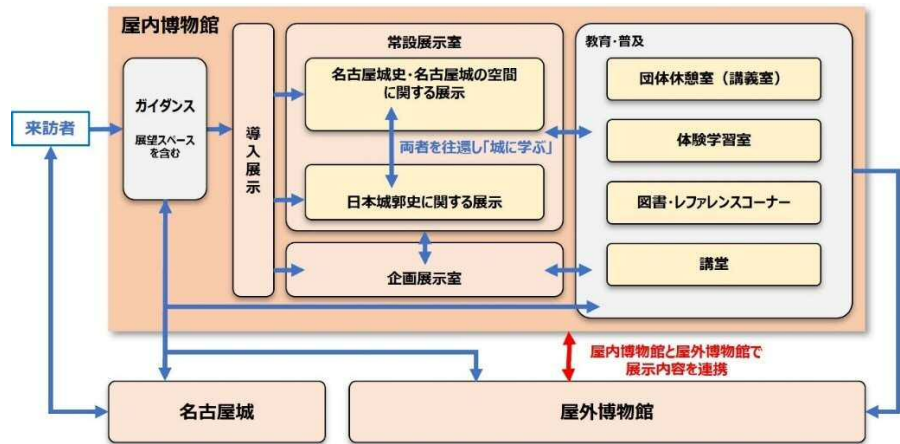
4 本博物館の観覧者動線の考え方

来訪者によって、本博物館内の順路が異なることを想定し、様々な巡り方ができるような自由動線を検討する。ガイダンスを起点に、来訪者が自由に展示を回れるようにしつつ、利用者サービス、教育・普及のプログラム等もあわせて、全体が相互補完的に連関する流れをつくる。また、来訪者に気軽に立ち寄ってもらえるよう、有料ゾーンと無料ゾーンの区別およびそれぞれの観覧者動線を検討する。

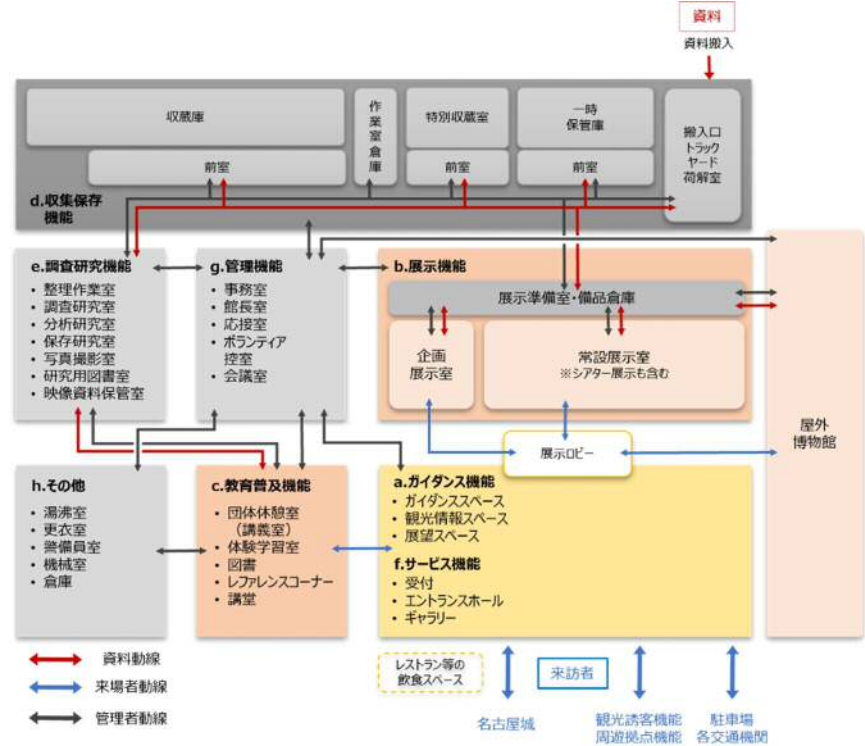
5 本博物館の諸室の機能構成

観覧者動線を踏まえつつ、機能配置や動線計画を想定する。特に、資料動線については、専用の搬入口を設置し、資料を安全に展示室まで移動できる独立動線とすることが重要である。

【来訪者の展示見学における動線の考え方】



【諸室の機能構成】



6 博物館ゾーンに必要なその他の機能

来訪者が快適に名古屋城観光を満喫できる環境を整え、本市を代表する観光地として、さらなる観光行動や経済効果に寄与することを目指す。また、先行する金シャチ横丁第1期整備エリアや芝居小屋風多目的施設と一体的な整備を行い、「観光の基点」としての魅力向上を図る。

【博物館ゾーンに必要な機能】

導入機能	内容
観光誘客機能	名古屋城及び博物館ゾーンの誘客に資する機能を導入する。整備候補区域は名城公園内であるため、設置可能な施設は公園施設に限られる。
周遊拠点機能	市内の他の歴史文化施設へといざなうため、名古屋城博物館（仮称）が担う名古屋城のガイダンスに加えて、市内観光の情報発信を行う機能を設ける等、来訪者の利便性を高めるインフラ整備を進める。
便益機能	将来の名古屋城及び博物館ゾーンへの来場者数を見据えた受入環境に必要な便益機能（トイレ、駐車場、休憩施設など）を強化する。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

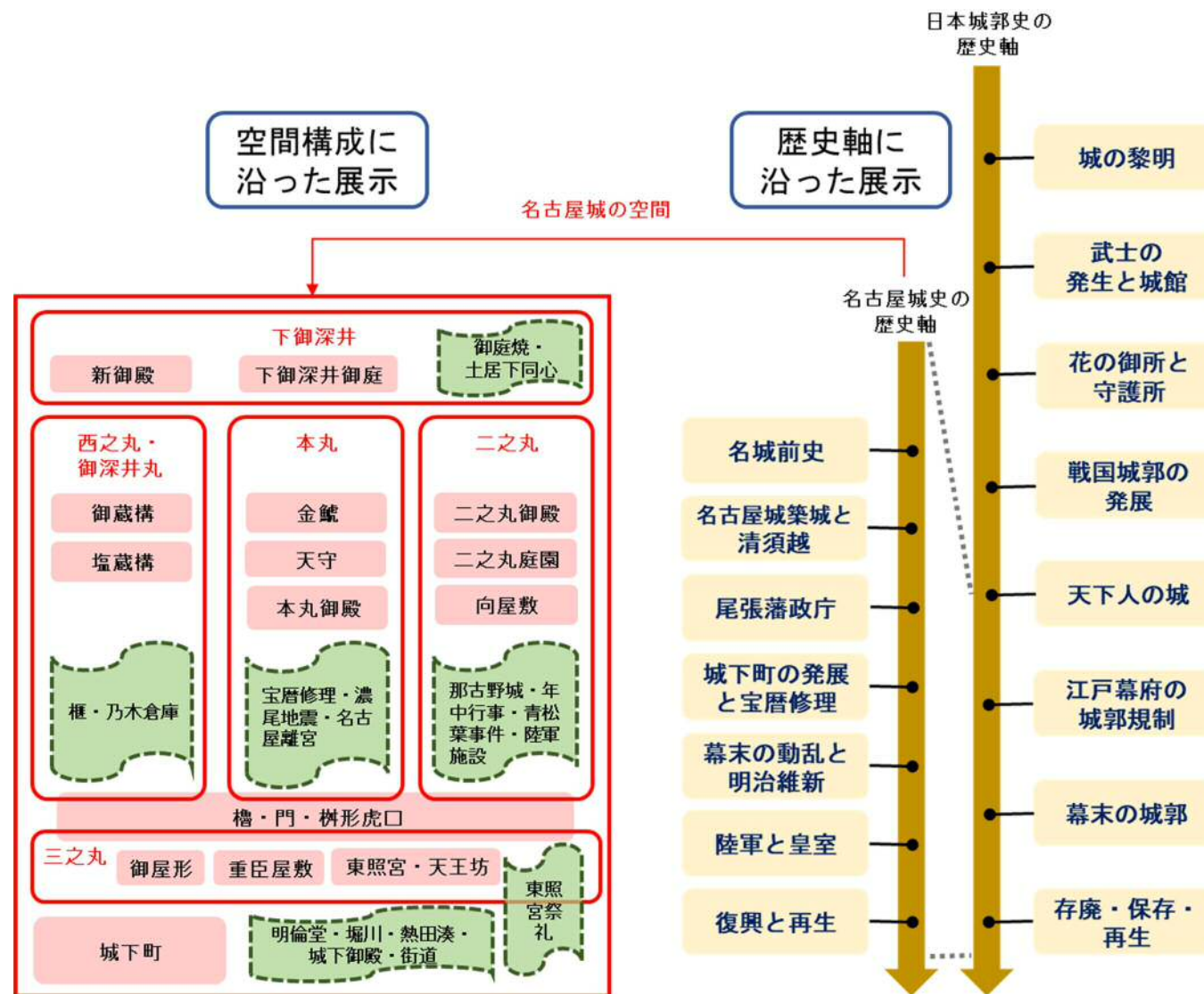
第4章 展示方針

1 展示ストーリーの考え方

前述の導入機能のうち、展示機能にあたる諸室では、来訪者目線でわかりやすく展示を行う必要がある。そこで、前述のコンセプトに基づき、歴史軸に沿った「名古屋城史」と「日本城郭史」を二本の主要な縦軸に据え、「名古屋城史」に関しては空間構成に沿った展示を工夫する等、空間的な広がりや横軸とした展示構成とする。

このような展示構成とすることで、名古屋城特有の歴史・事物に関わる展示のみならず、日本城郭の展開や、名古屋城の日本城郭史上の位置付けを明確にする展示を目指す。加えて、企画展等で世界の城についても適宜紹介することで、世界の城と比較し、日本城郭の特徴を分かりやすく明示する。また、名古屋城の他、日本の城郭に関する最新の調査・研究の成果を常に紹介する機能も併せ持つ施設とする

【展示ストーリーの構成】



2 展示の方針・全体構成・展示手法

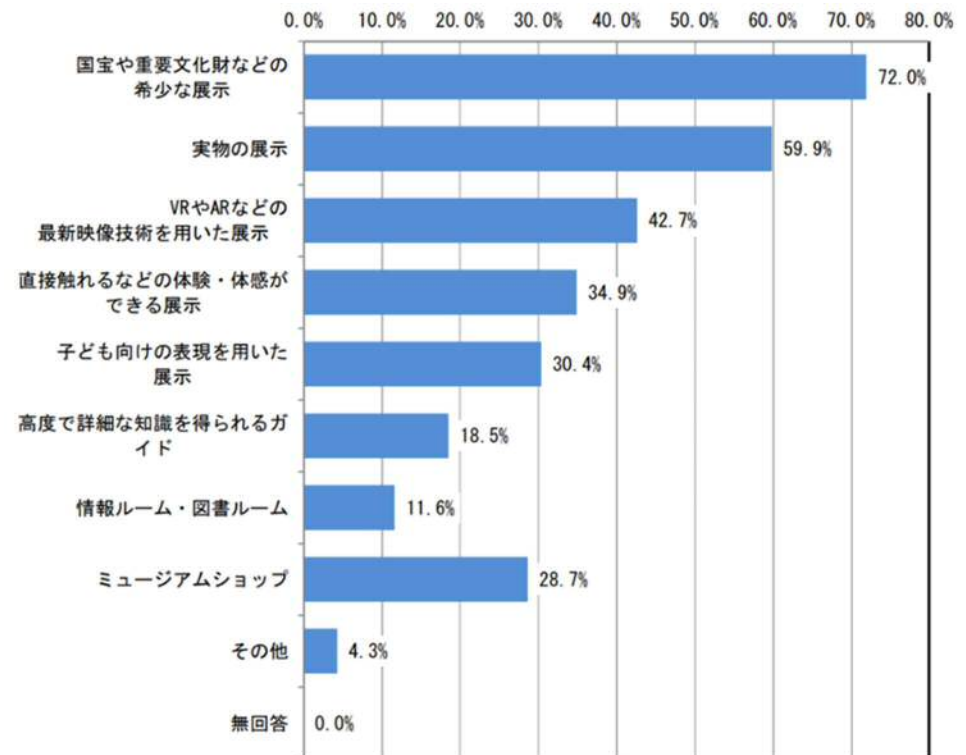
名古屋城や周遊観光のガイダンス機能を備え、名古屋城や日本全国の城郭を紹介する常設展示（屋内展示・屋外展示）や企画展示を行う。

展示空間では、名古屋城に関連する様々な実物資料を常時公開することを基本とし、理解の補助として模型・映像・グラフィック・IT・ICT等の最新技術を活用する等、多様な来訪者への対応に配慮する。また、屋内展示のみならず、歴史建造物や工作物・原寸模型などを紹介する屋外展示空間を設け、三之丸東照宮の遺構を保存・公開する遺跡部分とともに一体的かつ効果的に整備し、名古屋城の総合的な価値と魅力を深める構成とする。

併せて調査研究を充実させ、市民講座・体験活動・リファレンスなどを通じて、市民や来訪者の知的好奇心を満足させる活動を継続的に実施する。

実際、前述した市民アンケート調査では、市民が名古屋城博物館（仮称）に期待する展示や機能として、「国宝や重要文化財などの希少な展示」が最も多く（約72%）、次いで「実物の展示」（約60%）、「VR※1やAR※2などの最新映像技術を用いた展示」（約43%）と続いている。中でも、市民は「国宝や重要文化財などの希少な展示」を最も期待しており、国宝・重要文化財の展示・保管ができる文化庁基準仕様の展示室・収蔵庫を確保・充実する必要がある。

【名古屋城博物館（仮称）に期待する展示や機能（市民アンケート調査）】



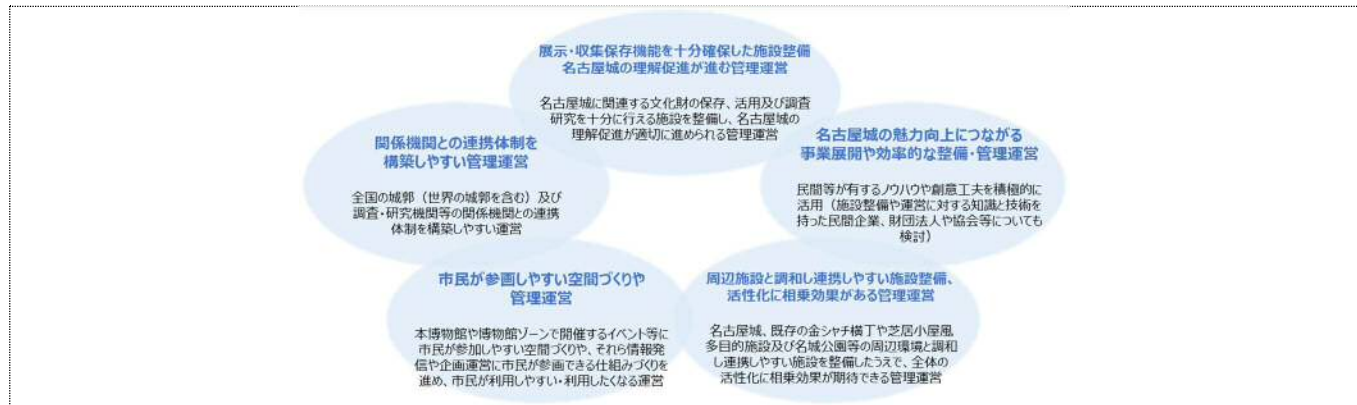
※1：VR（Virtual Reality）とは、一般に「仮想現実」と訳される。閉鎖された視界にCGを投影し、自分が仮想世界にいるかのような体験ができる技術のこと。

※2：AR（Augmented Reality）とは、一般に「拡張現実」と訳される。スマートフォンやタブレット端末などの機器を使用し、現実世界にCGを重ねて映し出す技術のこと。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

第5章 整備・運営手法

1 整備・運営手法の基本方針



2 整備・運営手法の案

○名古屋城博物館（仮称）の整備・運営手法の案

本博物館の整備については、博物館の主たる機能を原則公共による運営を想定しており、運営を見据えた設計・建設の行いやすさや施設に求める水準の反映しやすさから、市の普通財産としての整備が想定される。

本博物館の運営については、名古屋城に関連する文化財は国民共有の財産であり、長期的な観点に立ち、一貫した方針による収集保存、調査研究、活用を行うため、全機能に渡って公共が運営する案が考えられる（案1）。一方で、中長期的な方針に基づいた収集保存機能、調査研究機能及び展示機能のいわゆる学芸的分野は、専門性を持った職員が継続的、安定的に行う必要があるため原則公共が行い、民間のノウハウ等を生かした企画運営が期待できるガイダンス機能、教育普及機能は民間による運営とする案が考えられる（案2）。また、展示機能についても、長期的な調査研究に基づいて行う常設展示は公共が行い、企画展示や創意工夫によるにぎわい創出の活用を期待できる屋上空間は民間運営とする案も想定できる（案3）。

【想定される本博物館の運営手法】

施設	導入機能	案1		案2		案3	
		公共	民間	公共	民間	公共	民間
屋内博物館 （名古屋城博物館（仮称））	ガイダンス機能	○			○		○
	教育普及機能	○			○		○
	展示機能	○		○		○	○
	収集保存機能	○		○		○	
	調査研究機能	○		○		○	

○博物館ゾーンの整備・運営手法の案

博物館ゾーンに整備予定である施設を全て公共で整備する場合、特に施設整備に係る初期投資が必要であり、設計・工事期間にわたって市の財政負担が大きくなる（整備案1）。そこで、観光誘客施設、周遊拠点及び駐車場といった収益を期待できる施設には、積極的に民間を活用することで（民間施設として整備）、本市の財政負担を抑えられる可能性がある（整備案2）。その場合、設置管理許可制度、PFI事業及び公募設置管理制度（Park-PFI）の活用が考えられる（ただし、収益性が見込めないと民間参入が期待できないため、継続的なサウンディング調査により民間の参加意欲を注視する必要がある。）。

運営手法は、全施設を直営で管理運営する（運営案A）、民間ノウハウの活用を期待できる観光誘客施設、周遊拠点及び駐車場等は民間が管理運営する（運営案B）、運営案Bに加え、屋外博物館や遺跡部分の一部企画・運営も民間が分担する方法がある（運営案C）。その場合、屋内博物館と観光誘客施設、周遊拠点、

駐車場を跨いだ企画・運営を行い、整備候補区域全体を一体的に誘客・魅力促進を図ることが期待できる。

【想定される博物館ゾーン（整備予定含む）の整備手法／運営手法】

博物館ゾーンにおける 整備予定施設	整備案1		整備案2		運営案A		運営案B		運営案C	
	公共	民間	公共	民間	公共	民間	公共	民間	公共	民間
屋内博物館	(前述の通り)		(前述の通り)		(前述の通り)		(前述の通り)		(前述の通り)	
屋外博物館	○		○		○		○		○	○
遺跡	○		○		○		○		○	○
観光誘客施設	○			○	○			○		○
周遊拠点	○			○	○			○		○
駐車場	○			○	○			○		○

○周辺施設との連携強化

名古屋城及びその周辺のおもてなし機能を向上し、より一層の魅力向上とにぎわい創出を図るため、博物館ゾーンの運営に携わる事業者、金シャチ横丁（既存飲食物販施設、第二期芝居小屋風多目的施設等）に携わる事業者、名古屋城の運営に携わる事業者及び名古屋城総合事務所が共通の目的意識を持って連携していく事が重要である。そのための一方策として、本市と関連する各事業者が参画する定例会議の開催や、周辺の他管理者施設も含めた協議会の設置等のほか、時機を捉え更新時期に合わせた業務範囲の効率化等も視野に入れる等、更なるおもてなし機能の充実やにぎわいの創出について、今後も持続的に検討する必要がある。

3 整備・運営手法に関する事例調査

（1）設置者及び指定管理者制度の導入状況

令和元年度「日本の博物館総合調査」では全国の博物館 4,178 館のうち、歴史博物館は全 1,955 施設である。（以下、歴史博物館における有効回答館数 1,108 館の回答結果）

歴史博物館の設置者は、国立 22 館（2.0%）、県立 139 館（12.5%）、市立 528 館（47.7%）、町村立 155 館（14.0%）、公益法人 196 件（17.7%）及び会社・個人等 68 件（6.1%）であり、市立施設が約半数近い。

公立館（国立、県立、市立及び町村立）844 館のうち、指定管理者制度を導入している施設は 209 館（24.8%）であり、多くは公営（直営）である。（歴史博物館だけでなく博物館全体として）令和元年度調査における指定管理者制度を導入している公立館は 28.2%で、平成 25 年度調査からほとんど増えていないことから、全国の博物館における指定管理者制度導入の動きは一段落したと考えられている。

【全国の博物館の種別】



【歴史博物館の設置者】



【指定管理者制度の導入状況】



（2）PFI手法の導入状況

特定非営利法人 日本 PFI・PPP 協会のデータベースによると、全国の博物館における PFI 手法の導入実績は、計 10 施設（「美術館・博物館」用途の検索結果）あるが、歴史博物館は下関市立歴史博物館の 1 件のみである。

金シャチ横丁第二期整備 博物館ゾーン整備基本構想について

4 サウンディング調査

名古屋城博物館（仮称）の整備・管理運営に関して、民間事業者にヒアリングを行った（計 12 社（展示企業 3 社、イベント企業 1 社、旅行企業 1 社、インフラ企業 3 社、ゼネコン企業 2 社、不動産企業 2 社））。

【サウンディング調査で得られた主な意見】

項目	民間事業者の主な意見
事業参画	・事業全体に対して一社での対応には限界があり、地元企業も含めて複数社の応札となる。 ・展示内容を重視する施設（事業）とするならば、展示会社を主とした検討になる。
事業手法	・博物館事業での収益は難しく、DB+O（志段味古墳の「体感!しだみ古墳群ミュージアム」と同様）がよいと考える。PFI でも、サービス購入型+利用料金制併用が望ましい。 ・ミュージアム機能として独立採算による運営は難しいと認識。 ・名古屋城調査研究センターとの連携方法について十分に検討する必要がある。
事業期間	・設計・建設期間で 3～5 年、運営は 15 年の計 20 年間が想定される。 ・長期リスクに対する懸念があるため、15 年程度が望ましい。
施設規模	・博物館を集客の核とするためには、ある程度の規模が必要である上、学芸員が必要とする収蔵庫・保管庫の広さも確保しなければならない。
コンセプト	・名古屋が焼け野原になって、市民起点で再生したことをコンセプトに活かしたらどうか。
導入機能	・三之丸東照宮やオガタマノキ等の見どころとなる資産と紐づけた施設であるべきで、エリア全体で、必要となる機能や施設を考えるべき。 ・飲食機能は、金シャチ横丁と競合するため、難しいのではないか。 ・芝居小屋で開催するイベント内容をふまえて、本事業で整備する機能を検討する。 ・天守閣の中にある博物館機能を、名古屋城博物館（仮称）に持たせるという認識。
展示	・展示は 5～7 年周期で、運営期間を 20 年間とする場合は複数回リニューアルする。 ・屋外展示を行うなら、広場空間（フェスティバル空間）としての機能を持つことも重要。 ・企画展を行う場合、名古屋城と連携した開催が重要。 ・天守閣の建替えに関するプロセス・ストーリーを見せるのもよい。本丸御殿のように回遊できる施設としたらどうか。
既存施設との連携	・能楽堂との連携した企画や集客も期待できる。 ・周辺施設の建物との調和を意識した景観にする視点も重要。 ・名古屋城エリアに点在する施設群をまとめたエリア全体のビジョンが必要。
整備候補区域	・ボーリング調査や埋蔵文化財調査は早期に行うとよい。 ・整備候補区域内には建物、樹齢が古いオガタマノキがあり、移転に関する調整が必要。 ・敷地外との動線（久屋大通方面からの人の流れ）や連携が重要。 ・出来町通より北側は、かつての旗本の居住地だった歴史的背景もふまえて、徐々に名古屋城エリアとして整備できるとよい。
名古屋観光	■他施設とのすみ分け ・リニューアルオープンする名古屋市博物館や徳川園とすみ分ける。 ・LEGOLAND JAPAN 等は子供向けの施設なので、名古屋城界限は購買力があるシニア層の取込みも重要。 ■観光客の動線・人の流れ ・名古屋は観に行く観光スポットが少ない印象で、観光客が観に行くスポットが必要で、名古屋城博物館（仮称）の構想自体はよいと思う。 ・市内に点在する観光拠点に対して人が流れていけないことが課題。 ・久屋大通のテレビ塔周辺では地上を人が回遊しているので、そこからの人の流れを生むことが重要（現在は、東西方向の高速道路や国の施設により分断されている。）。 ■市全体の観光軸 ・名古屋城と熱田神宮をつなぐ本町通はシンボル通りで、強固な地盤の上を通っているが、道が狭く、途中で歓楽店があり“線”として生かしづらい。

第 6 章 基本計画策定に向けた課題

1 基本計画策定に向けた必要な取り組み

基本計画策定のフェーズでは、名古屋城博物館（仮称）の実現に向け、より具体的な検討が必要となる。基本計画の策定に向け、必要となる取り組みを以下にまとめる。

【基本計画策定に向けて必要となる取り組み】

項目	内容
コンセプトを実現する施設・展示計画の策定	・基本計画策定に向けて、「城に学び、城と歩む」という博物館のコンセプトと結びつく、博物館の施設計画や展示計画を具体的に策定する必要がある。 ・来場者に提供する体験価値を明確にするとともに、その実現のためにコレクションの充実を検討する。 ・これらの博物館像を追求するために必要となる、庁内の関係部署、企業や団体など様々な主体との連携を構築していく。
博物館ゾーン整備内容の具体化	・「名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイ」という博物館ゾーン全体のコンセプトの実現に向け、必要となる機能や施設、ゾーニングの検討を詳細に進めていく必要がある。 ・整備や管理運営手法について、民間事業者へのサウンディング調査で得られた情報も踏まえ、方向性を具体化する必要がある。
事業予定地の決定	・名古屋城博物館（仮称）は名古屋城からの動線や駐車場との立地関係、名城公園全体での動線を踏まえて建設場所を設定する必要があり、事業予定地の決定にあたっては慎重な検討を要する ・現在想定する整備候補区域には、東海農政局、水資源機構、公園といった施設があるため、この整備候補区域を事業予定地とする場合、これらの所管省庁に対して移転時期等を調整するために、慎重にコミュニケーションを図っていく必要がある。
博物館として必要な機能と施設規模の確保	・本基本構想に位置付けられた活動を円滑に展開していくためには、博物館に関わる諸機能について、十分な規模を確保することが重要である。 ・市の財政状況を勘案しながら、将来を見据えた博物館の整備を、今後の基本計画で詳細に定めていく必要がある。
市民への周知や機運醸成	・本事業の実施にあたっては、市民や地元関係者の理解を得たうえで進めていくことが大前提となる。そのため、市民や地元関係者の意見も取り入れながら、着実に進めていくことが重要である。 ・特に、本事業では基本構想策定～運営開始までに数年程度かかるため、継続的に事業を周知し、機運醸成を図っていく必要がある。

2 おわりに（本基本構想のまとめ）

次の段階である基本計画策定のフェーズでは、本基本構想で示した基本的な考え方にに基づき、このエリア一帯が知の拠点・観光の基点としての役割を果たすことで、「名古屋城から始まる歴史探訪のゲートウェイ」を体現できるよう、2 か年程度を目途に、より具体的な検討を進める。その後は、名古屋城木造天守復元事業との連携に留意しながら順次、設計、工事、開業準備と進める。